

平成 22 年 6 月 28 日現在

研究種目：基盤研究（C）
 研究期間：2007～2009
 課題番号：19530533
 研究課題名（和文） 大学を人的・情報の地域資源とする『今働けないひと』への
 労働機会の創出
 研究課題名（英文） Creation of the Opportunity of Working for the Person who can't
 work: Using University as a Community Resource of Personnel and Information.

研究代表者
 望月 昭（MOCHIZUKI AKIRA）
 立命館大学・文学部・教授
 研究者番号：40129698

研究成果の概要（和文）：

本研究では、「対人援助学」の枠組みの下で、知的障害のある生徒や長期「ひきこもり」の成人を対象として、「今できる仕事」を成立させる「援助つき就労（ジョブ）」の成立と展開に向け、大学を人的（学生・院生など）および情報的な地域資源として活用した連携的支援の方法を検討した。前者では学生ジョブコーチという学生組織、後者ではファーストステップ・ジョブグループという当事者の親グループによる支援組織を通じて、当事者の自己決定やセルフマネジメントを中心とした支援を通じてキャリア・アップや一般就労を実現した。

研究成果の概要（英文）：

This research examined the method of collaborative practices between university and some community sectors based on the Science for Human Services (Taijin-enjo gaku) for creating new working opportunities in which students and adults with some disabilities, i.e., mental disability and long-term HIKIKOMORI, could participate not with intensive training but with behavior repertoires that they had at that present. The carrier-up and employment (with and without support) in each participant were realized through the establishing self-determination and self management behavior by the supports of Students Job Coach (SJC) and First Step Job Group (FSJG), both of them were the groups managed by the students and graduate students of Ritsumeikan university.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	1,900,000	570,000	2,470,000
2008年度	700,000	210,000	910,000
2009年度	900,000	270,000	1,170,000
年度			
年度			
総計	3,500,000	1,050,000	4,550,000

研究分野：対人援助学

科研費の分科・細目：社会学・社会福祉学

キーワード：就労支援、地域連携、対人援助学、学生ジョブコーチ、ファーストステップ・ジョブグループ

1. 研究開始当初の背景

(1) 「障害」のある個人に対する就労支援についての研究としては、課題分析 (task analysis) を行い訓練を行う、就労の初動を促すために可能な限り本人の自己決定を尊重する、就労のモチベーションを高める工夫をする、職場における物理的・人的環境に変更を加える、といったものが挙げられる。しかしこれらの研究では、教育設定 (養護学校、職業訓練学校・施設) におけるスキルアップのための教授・訓練が、就労現場における訓練や援助設定という、2つの場面で個別に扱われてきた傾向がある。

(2) 「今、働けない」個人の状況を打破するためには、上記したような支援方法を統合的に含んだ上で、さらに、それぞれの個人の現状を認めただうえで、教育設定と現実の就労場面を取り次ぐ第3の設定として、人的・物理的な「援助つきの力」で労働を可能にする就労場面を創出し、そこでの体験を本格就労に向けて活用展開していくこと、で展開される「就労体験場面」において、「どのような援助があれば就労が可能か」という人的・物理的環境支援(「援助」機能)の同定と、それを社会環境に定着させるための方法(「援護」機能)のための連携的な方法論の開発、といった発展的改良が必要である。

(3) そのような支援には、従来、ジョブコーチシステムが機能としては最も近いものとして挙げられるが、実証的にその援助過程(教授、援助、援護)を詳細に検討した研究は極めて少ない。

2. 研究の目的

当研究では、なんらかの障害(知的障害・長期の「ひきこもり」など)を持つ「今、働けない」個人を対象に、長い訓練過程を前提とした将来でなく、「今」、現在持てる能力に応じて遂行が可能な労働の場を創造し、当事者に「働く行動」を実現させるために、知的障害のある生徒や成人を対象に、労働機会を保障拡大するために、労働体験や実際の就労継続を過不足なく援助する「学生ジョブコーチ」のシステムを大学教育の一環として構築し、その機能を検討する、ひきこもりの個人に対しては、当事者の自己決定(選択)を最大限尊重し、現在「できる」行動レパートリーを用いた「仕事 = job」を、親グループと地域資源(大学・NPO など)との連携で創造することを実践的目標とする。当研究の

研究の目的は、上記のことを、既存の社会学や心理学の枠を超えた「対人援助学」(Science for Human Services)の構築を念頭に、関係する諸学を超えた研究者や地域関係者によって、学際的(学融的)実践的に、実践するための方法論や手続きについて検討を行うことにある。

3. 研究の方法

(1) 学生ジョブコーチシステムによる就労支援

対象者：養護学校(京都においては総合支援学校)高等部の生徒および一旦企業等に就労した卒業生。方法：「対人援助」における3つの主要な機能である、「援助」「援護」「教授」という連環的な支援(望月,2007 参照：図書6))を、応用行動分析学の枠組みを用いて実践・記述する。「援助」は支援ツールや人的援助による介入、「援護」は必要な援助設定の現場での定着のための要請、「教授」はそのもとでの指導である。教授過程においては、課題分析(Task Analysis)による工程表にもとづき、人的援助を系統的にフェイドアウトするシステムティック・インストラクションの手続きを用いた。また、ターゲットとなる行動は、対象者によって異なるが、作業の外的評価を受けてスキルアップするのではなく、当事者自らが評価を行ったりあるいは工程を自ら改変するようなセルフ・マネジメント行動を極力導入するデザインを用いた。

(2) ファーストステップ・ジョブグループ(FSJC)による「脱ひきこもり支援」

対象者：長期の「ひきこもり」を呈している成人。方法：親子グループを基礎ユニットとして、現在でも「できる」仕事に報酬を伴わせるジョブグループを設定し、当事者の自己決定を尊重しながら、次第にその仕事内容を現実の社会の中に求めていくという方法をとった。仕事提供は、家内作業から始まり、次にグループの相互の家庭から切り出された仕事、そして大学・学会などからの依頼仕事、NPO法人での事務仕事などへ次第にその範囲を広げていった。

親は定期的にミーティングを持ち、自らの子の仕事成立や他の子に成立可能な仕事の提案を行う。またそうした具体的事例を発表、討論することで、いったん社会的基準とは離れて、絶えず「今できる」ことを評価する方針を相互に確認した。また、年に数回、親グループのメンバーが講師となって公開のシンポジウムや学集会を開き関係者(行政、親)に理念や成果を公開した。

4. 研究成果

(1) 学生ジョブコーチによる支援

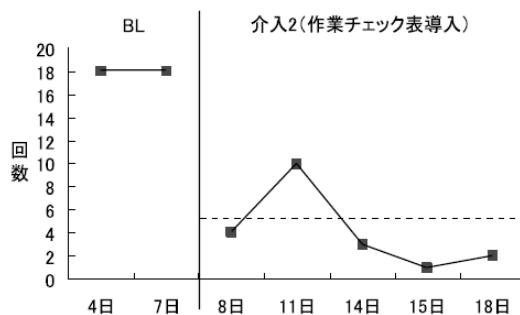
学生ジョブコーチの支援を通じた新たな就労支援の方法： 2004年から始まった学生ジョブコーチシステムにおける学生の役割は、当事者の作業の詳細な記述を通じて、必要な援助設定（支援ツールや人的援助）やキャリアアップ（作業内容の高度化など）の提案を行うことであった。

今次（2007～2009）の期間では、単に当該作業への適応にとどまらず、ひとりひとりの個人が、より仕事にコミットし（積極的に自らの作業方法に関与しその達成を表現する）、現在および将来の継続的就労の実現に向けたメタスキルを獲得できるかが支援内容の中心となっていた。

そこでは、自らの就労作業の「てがかり」（弁別刺激）となるツールの使用や、自己評価を可能にする支援（雑誌論文1）5）学会発表、6）の方法が検討された。そうしたセルフ・マネジメントと呼ばれるメタスキルの獲得の支援においては、従来の工程表（課題分析表）による評価や全課題提示法による支援だけではなく、絶えず相互の行動単位間の関係に注目した「課題分析」が必要不可欠であることが示された（雑誌論文3）5）。このことは行動分析的な観点からは基本的な課題ではあるものの、従来の就労支援やジョブコーチのマニュアルには取り上げられることが少なかった（雑誌論文3）。

下図は、太田ら（2008：雑誌5）が、ある実習場面で、それまで過剰に職員に作業報告を行い、さらには作業の仕上げが不完全だった生徒に対して、当事者に自らの作業の評価を行わせ、失敗した場合でも正確に報告することを強化した結果、劇的に報告回数が減ったことを示したものである。

こうした結果は、就労支援の場における過剰な支援や、負の強化を伴う抑圧的な指導を行ってしまう状況と強く関連するものと思われる。そのような状況が生まれる背景には、障害のある生徒に対する学校内での就労指導の方法や、実習を含めた就労実習や移行後の継続的就労を射程においた「情報移行」のシステムにも検討・改良すべき課題があると



思われる（図書1）6）。

(2) ファーストステップ・ジョブグループ (FSJG) による「ひきこもり」支援

下の図は、過去6年間の13人のひきこもり当事者が、グループによって創造されたジョブを遂行した累積頻度を表している（望月・上田, 2009：図書3）から）。

今次3年間での「仕事（job）成立」が特に増加していることがわかる。その中には数年間停滞していた当事者において累積が開始した例も含まれる。またグループ内でのジョブ交換を脱して、某NPOの事務職として常勤で職を得たり、職探しの活動を自立的に行うという「卒業生」も輩出するに至っている。

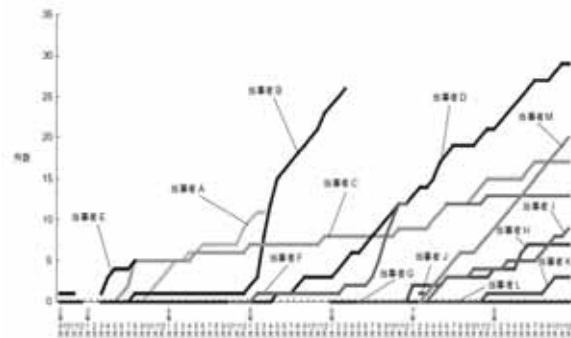
従来、「居場所」の設定や、「受容」といった具体的な当事者のコミットが不明確な支援の在り方に対して、当プロジェクトにおいては、絶えず選択肢を提示しつづけること、その上で、現在「できる」行動に対して、それを「ジョブ」という形で評価し、またその方針を親グループの中で相互に強化する点が特徴である。

最近数年間の伸び率は、新会員の参加と同期しているが、それは必ずしも新しい当事者による達成ではなく、旧会員の行動変化も含まれている。このことは旧会員（親）が新会員を指導・助言することにより自らの行動変容を促進するサービス・ラーニング的な効果の可能性を示唆するものである（上田、2010、印刷中）。

(3) 包括的成果と今後の課題

当プロジェクトでは、「学生ジョブコーチ」と「ファーストステップ・ジョブグループ」という2つの大学を地域資源のひとつとした、障害のある個人への持続的な就労支援を行う可能性が検討された。

そこで改めて浮き彫りになったものは、スキルの獲得あるいは一時的な就職移行支援ではなく、「働くこと」に対する当事者の積極的なコミットメントを継続的に維持できるような継続的サービス体制の必要性である。そのためには地域資源の間の情報共有の方法や、また支援そのものに対する基本的枠組みの再検討が必要である。



5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計9件)

松田光一郎・望月昭、メモリーノートを活用した体験実習におけるセルフ・マネジメントの効果と維持、立命館人間科学研究、18、pp.49-62、査読有、2009

藤信子・石川順子、生活の中で話を聞くこと デイサービスセンターにおける経験から、立命館大学心理教育相談センター年報、7、pp.45-51、査読無、2009

中鹿直樹・望月昭、課題分析を使った指導の記録を就労支援に活用する、立命館人間科学研究、20、pp.53-64、査読有、2009

吉岡昌子・武藤崇、職場のストレス・マネジメントへの適用、季刊こころの臨床a・la・carte、28巻1号、pp.158-162、査読無、2009

太田隆士・稲生ゆみ子・松田光一郎・望月昭、総合支援学校高等部生徒の職場体験実習における機能分析とセルフ・マネジメント行動の獲得に向けて、立命館人間科学研究、17、pp.107-116、査読有、2008

松田光一郎・望月昭、行動障害を呈する自閉症者への積極的行動支援 機能的アセスメントに基づくコミュニケーション行動の改善、立命館人間科学研究、17、pp.117-128、査読有、2008

望月昭、学生ジョブコーチという試み 学生による障害者(生徒)の就労実習支援システム、立命館文学、599、pp.134-140、査読無、2007

寺崎幸子・藤信子、ビッグイシューの販売支援をつうじた就労支援の意味 - 顧客と販売員仲間による販売情報のフィードバックが及ぼす効果について -、立命館人間科学研究、13、pp.41-58、査読有、2007

中鹿直樹、他個体の行動的刺激による刺激性制御、立命館人間科学研究、14、pp.73-84、査読有、2007

[学会発表](計8件)

望月昭・武藤崇、Behavior Human Serviceology at Twenty: What is a Heart of Behavior Analysis?、日本行動分析学会第27回大会、2009.7.10、筑波大学

小林靖尚・鈴木史織・川村徹也・杉島恵理子・齋藤恵利佳・中鹿直樹・望月昭、学生ジョブコーチによる一般企業に就労後の問題に関する継続的就労支援の事例 - 企業・福祉・学校・大学の連携を目指して -、対人援助学会第一回大会 <http://humanservices.jp/pdf/19kobayashi.pdf>、2009.11.6、立命館大学

杉島恵理子・望月昭・中鹿直樹、就労場面における知的障害者の作業記録の自立に向けた支援 - 支援ツールとしての時間計

算定規と記録表の効果の検討、日本行動分析学会第27回大会、2009.7.10、筑波大学
望月昭・中鹿直樹・山口真理子・太田和宏・朝野浩、学生ジョブコーチという取り組み：大学という資源の活用、日本特殊教育学会第46回大会自主シンポジウム、2008年9月11日、鳥取大学

武内将仁・本多恵美・鈴木史織・望月昭、就労実習におけるスケジュール表導入による生徒の行動の変化、日本行動分析学会第26回大会、2008.8.9、横浜国立大学

山口真理子・望月昭、総合支援学校生徒に対する就労体験実習におけるセルフ・マネジメント・スキル向上に向けた支援内容の検討、日本行動分析学会第26回大会、2008.8.9、横浜国立大学

松田光一郎・望月昭、養護学校生徒における接客スキルの形成、日本行動分析学会第25回大会、2007年8月4日、立教大学

丹生卓也・崔希柄・望月昭、養護学校生徒の就労実習場面における金銭管理、日本行動分析学会第25回大会、2007.8.4、立教大学

[図書](計7件)

望月昭・サトウタツヤ・中村正・武藤崇(編著)、「対人援助学の可能性：『助ける科学』の創造と展開」、福村書店、全252ページ、2010年

望月昭・中村正・サトウタツヤ(編著)、「対人援助学キーワード集」、晃洋書房、全247ページ、2009年

望月昭・上田陽子(編集)、「ファーストステップ・ジョブグループ(FSJG)：対人援助学的「脱ひきこもり」支援」、オープンリサーチ整備事業「臨床人間学の構築」ヒューマンサービスリサーチ16、立命館大学人間科学研究所、全72ページ、2009年

中鹿直樹・望月昭(分担執筆)、「就労と対人援助」、田中農夫男(編)「ライフサイクルでよむ障害者の心理と支援」、福村書店、第17章 pp.224-232、2009年

望月昭・武藤崇・吉岡昌子・青木千帆子(監訳)、「ビギニング・コミュニケーターのためのAAC活用事例集」、福村書店、全585ページ、2009年

望月昭(編著)、「対人援助の心理学」、朝倉書店、全188ページ、2007年

藤信子(分担執筆)、高齢者および介護者へのコミュニティ支援、日本コミュニティ心理学会編 コミュニティ心理学ハンドブック、東京大学出版会、全811ページ、2007年

[その他]

ホームページ等：

「対人援助学のすすめ」(ブログ)
<http://d.hatena.ne.jp/marumo55/>

望月昭のホームページ
<http://www.psy.ritsumei.ac.jp/~mochi/>

脱ひきこもり支援グループ(ファーストステップジョブグループ)のホームページ
<http://www.human.ritsumei.ac.jp/fsjg/index.html>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

望月 昭 (MOCHIZUKI AKIRA)
立命館大学・文学部・教授
研究者番号：40129698

(2) 研究分担者

武藤 崇 (MUTO TAKASHI)
立命館大学・文学部・准教授
研究者番号：50340447

藤 信子 (FUJI NOBUKO)
立命館大学・応用人間科学研究科・教授
研究者番号：30388102

中村 正 (NAKAMURA TADASHI)
立命館大学・産業社会学部・教授
研究者番号：90217860

佐藤 達哉 (SATO TATSUYA)
立命館大学・文学部・教授
研究者番号：90215806

(3) 連携研究者

中鹿 直樹 (NAKASHIKA NAOKI)
立命館大学・文学部・講師
研究者番号：20469183

(4) 研究協力者

上田 陽子 (UEDA YOKO)
立命館大学・人間科学研究所・客員研究員
/ファーストステップジョブ・グループ代表